

主 題：主からの祝福を忘れない 7

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章8節

今ちょうど私たちが賛美したように（聖歌604番）、神様の恵みを数えること、忘れないこと、覚え続けることが我々の信仰生活には大切だということをパウロはコリントの教会に教えています。ですからパウロは神様が与えてくださったその恵みを最初のところに記していたのです。私たちは神様から救いをいただき、すべては神の恵みであった。我々はサタンに属する者であったのに、今は神に属する者だと。また私たちは神から神の恵みと平安をいただいたと。この救いのために神は私たちが担い切れない大変大きな犠牲を払われたこと。そして、ただ救われただけではなく私たちが新しく造り変えてくださり、私たちを用いるために霊的な賜物を与えてくださり、主にお会いする日をちゃんと備えてくださった。だから私たちはその日を待ち望みながらこの日を過ごすのです。こんな祝福を神様はあなたに与えてくださった。

### ☆8つ目の祝福：「救いの保証」

#### A. 「完全な罪の赦し」：神によって完全に赦された者 8節

きょうは最後から二つ目の祝福を見ます。その八つ目の祝福は「救いの保証」です。神の恵みによって救われたならば、あなたは絶対にその救いを失わないという神様からの祝福です。8節に「主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで強く保ってください。」とあります。パウロはそのことをここで教えるのです。

まず最初に書かれている「私たちの主イエス・キリストの日」が一体どんな日なのか——。次に、その日まで神はあなたのためにどんなみわざをなしてくださるのか——。「最後まで強く保ってください」と記されています。一体どういうことを約束してくださったのか、どういうみわざを主がなされるのか——。そして最後に、あなたを「責められるところのない者として」、「保って」くださることについての説明をパウロが記しています。このみことばの中でパウロが教えるのは一体どういう祝福なのか、ご一緒に見ていきたいと思います。

#### 1. 「私たちの主イエス・キリストの日」について

文脈を見ると、7節の最後に「熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。」と記されています。前回、私たち救いにあずかった者たちは、主が戻って来てくださるその日を待ち望む者として新しく生まれ変わったのだということを見ました。主が帰って来られ、その主にお会いするならば、私たちはあなたや私のために十字架で死んでくださり、よみがえられ、今も生きておられる愛する主の御顔を拝することができる。しかもその時に私たちは、救われてから始まった変態の働きが完成するのです。主イエス・キリストに似た者に変えられていくという働きは永遠に続くわけではありません。我々が主にお会いした時にその働きは終わるのです。感謝なことに、その働きが終わるということは、もう私たちは完全に永遠にこの罪から解放されるということ、もう私たちは罪によって神を悲しませることが100%なくなるのです。そしてその時に我々はイエス様を信じてからイエス様にお会いするまでの信仰の歩みに関して、神様からご褒美を、報いをいただくのだとパウロは語った上で、それをこの8節で「私たちの主イエス・キリストの日」と呼んでいるのです。文脈からそのことは明らかです。

#### 1) 「私たちの主イエス・キリストの日」：主イエスを信じた人が対象・教会のため

ここに出てきた「私たちの主イエス・キリストの日」や「キリストの日」、「主イエスの日」、こんな表現が聖書の中に出てきます。これらはパウロの独特の表現です。パウロはイエス様にお会いするその日のことをこんなふうに表現するのです。今私たちが見ている「私たちの主イエス・キリストの日」というのはここにしか出てきません。「キリストの日」はピリピ1：10と2：16に出てきます。「キリスト・イエスの日」はピリピ1：6、また「主イエスの日」は1コリント5：5や2コリント1：14に出てきます。

#### 「私たちの主イエス・キリストの日」と「主の日」の違い

「キリストの日」や「キリスト・イエスの日」、「主イエスの日」は、呼び方は違うのですが同じことを言っています。これらの日は我々クリスチャンたちにとって大変喜ばしい日です。私たちが信じているイエス・キリストが戻って来てくださる日です。イエスという名前は「主は救い」という意味です。キリストというのは「油注がれた」という意味で、旧約聖書のメシヤのことです。どちらにしても救い主を待っているのは我々です。ですから呼び方は違いますが、こういう呼び方をした同じ日があるので

す。私たちが区別しておかなければいけないのは、このように呼ばれている日と「主の日」と呼ばれている日は全く違う日だということです。

(1) 「私たちの主イエス・キリストの日」：主イエスを信じた人たちが対象。教会のため

・「褒美をいただく日」　ピリピ2：16、1コリント3：13

別の呼び方もありますが、この「私たちの主イエス・キリストの日」というのは主イエスを信じた人々とイエス様を信じた人々の集まり、教会が対象です。なぜならこの日に私たちは神様から褒美をいただくのです。ピリピ2：16に「いのちのこばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。」とあります。つまり我々ひとりひとり救いにあずかった者たちは、この世にあつての責任があるということです。「世の光」としてしっかりとキリストのすばらしさを世に証しなさいと言うのです。結果、「そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。」と。我々が救われた者として、主が喜ばれることを忍耐を持って行っていくならば、必ずその働きに対して主が報いてくださる日が来るということです。ですから、この「私たちの主イエス・キリストの日」というのは私たちの信仰者としての清算がされる日、神様からすばらしい報いをいただく日、褒美をいただく日です。

・「待望の日」　2テモテ4：8

だから私たちはその日を待っているのです。我々が待望する日です。同じパウロは2テモテ4：8で「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」、パウロの地上における最後のことばだと言われているこの2テモテ4章の中で、もう私の死が近い、この世を去る時が近いと知った上でパウロはこう言うのです。「義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と。なぜパウロがこんなことを言ったかということ、イエス様にお会いすることをしっかりと心に刻んで準備している者たちはその日をむだには過ごさない。我々が何度も学んできたように、罪から離れて行こうとするのです。パウロはそんなふう生きていた。だから「主の現われを慕っている者」は同じように神様からの称賛をいただくのだと言うのです。本当に感謝なことに、みことばはこのように生きなさいとただ命じるだけではない。具体的にどう生きることがみこころに沿った歩みなのかまで教えてくれています。

イエス様がきょう帰って来るかもしれないと、ただ頭でそう思っていなさいではなく、本当にそれを心から受け入れている人はそれが自分の生き方に反映されていくのです。だとしたらきょうちゃんとその備えをしなければいけない。そうして人々はその日を主の前に正しく生きようとするのです。パウロが言っているのはまさにそういうことで、私はその日を待っていると。これが今我々が見ている「主イエス・キリストの日」や「キリストの日」、「キリスト・イエスの日」、「主イエスの日」と呼ばれている日です。クリスチャンが対象なのです。

(2) 「主の日」：主イエスの救いを拒んだ人たちが対象

では、「主の日」というのはどうかということ、これはイエス様の救いを最後の最後まで受け入れなかった人たち、拒み続けた人たちが対象です。

・「さばきの日」：イザヤ2：12、イザヤ13：6、9、ヨエル1：15、エゼキエル7：19、ゼパニヤ1：14、1テサロニケ5：2-3

ですからこの日はさばきの日です。神に対して行ってきた罪の清算がなされる日、自分たちが神の前に犯した罪にふさわしい報いを受ける日だと言えます。旧約聖書の中にこの「主の日」についてのたくさんのお話がなされています。イザヤ2：12、またイザヤ13：6-9を見ると「泣きわめけ。主の日は近い。全能者から破壊が来る。それゆえ、すべての者は氣力を失い、すべての者の心がしなえる。彼らはおじ惑い、子を産む女が身もだえするように、苦しみと、ひどい痛みが彼らを襲う。彼らは驚き、燃える顔で互いを見る。見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。」とあります。神ご自身が罪人をそこから根絶やしになさると。ですから神様のさばきの日です。ヨエル1：15やエゼキエル7：19もそうです。ゼパニヤ1：14にもその日のことが記されています。「主の大いなる日は近い。それは近く、非常に早く来る。」と。15-18節にも「その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、やみと暗黒の日、雲と暗やみの日、角笛とときの声の日、城壁のある町々と高い四隅の塔が襲われる日だ。わたしは人を苦しめ、人々は盲人のように歩く。彼らは主に罪を犯したからだ。彼らの血はちりのように振りまかれ、彼らのはらわたは糞のようにまき散らされる。彼らの銀も、彼らの金も、主の激しい怒りの日に彼らを救い出せない。そのねたみの火で、全土は焼き払われる。主は実に、地に住むすべての者をたちまち滅ぼし尽くす。」と。大変なことが記されています。神に逆らった者たちに対して神の正義が下される、神のさばきが下ると旧約聖書は教えます。その日が確実に近づいていることを我々は知っています。

新約聖書の中でもパウロは1テサロニケ5：2-3でこの「主の日」について教えています。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが増すようなもので、それをのがれることは決してできません。」と。必ずその日が来るのだということが聖書によって記されています。突然その日が訪れると。神に逆らってきた者たち、神が備えてくださった救いを拒み続けて来た者たちに対して、ふさわしい報いが下るのだと。

#### ・「恐れながら待つ」：ヘブル10：27

ですから彼らはその日を待望するかということそうではありません。彼らは恐れながらその日を待つのです。ヘブル10：27が「ただ、さばきと、逆らう人々を焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」と言っています。

この8節のみことばが教える「私たちの主イエス・キリストの日」というのは私たち救いにあずかった者たち、罪の赦しをいただいた者たちがこの地上におけるすべての働きを終えて、主イエス・キリストにお会いする日のことを言っているのです。

#### 2. 「最後まで堅く保ってください」：主イエスにお会いする日まで神がなすみわざ 2コリント1:21

さて、そのことが8節の終わりに「最後まで堅く保ってください。」と記されていました。実はこのことばはもう既にコリントの手紙の中に出てきています。6節に「確かになった」ということばがあります。これと全く同じことばが使われています。6節では、福音のメッセージを聞いた彼らの心の中に、この福音のメッセージが固定される。メッセージをただ聞くだけではなくて、彼らは心からそれを受け入れたということが記されていました。この同じことばが8節に使われていて、それは最後まで、特に「堅く保」つと日本語に訳されています。これはまさに最後にイエス様にお会いするその時まで神がなしてくださるみわざ、神の働きです。

#### 1) 「神の永遠の保証」 ヨハネ10：28

神様が何をしてくださるのか——。ここで言われていることは、神の守り、神様の永遠の保証です。すなわち主によって贖われた者、救われた者は神ご自身がその救いを最後まで、つまり主イエスにお会いする日まで完全に守ってくださると教えるのです。これを神学的には「救いの永遠堅持」と言います。神ご自身がこの救いを永遠に守ってくださるということです。私たち、神の恵みによって救われた者たちがその救いを失うことは絶対にないと言うのです。まさにこれはイエス様ご自身が教えられた約束でもありました。ヨハネ10：28でイエス様は「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。」と永遠のいのちを約束された。「彼らは決して滅びることが」ないと。神によって救われていながらその救いを失うということは絶対にないということです。「また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」、全能である神が救われた人、つまりあなたを守ってくれている。どんな敵が来ようとも神の手からあなたを奪っていくことはできないという我々の救いについて神が約束してくださった祝福です。あなたも私もこの救いを決して失うことがないと。

#### ピリピ1：6

パウロ自身もそのことを信じて確信を持っています。ピリピ1：6に「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」とあります。

#### ・「良い働き」

「良い働き」というのは救いのことです。神はあなたのうちに働いてくださって、あなたに救いを与えてくださった。まず神様があなたのうちにこんなすばらしい働きをなしてくださった。「あなたがたのうちに良い働きを始められた」と言っている以上、この「良い働き」、救いのみわざは神のわざであるということは見取れます。神が救いのみわざをなしてくださる。ですからみことばは我々「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」（エペソ2：3-5）と言います。つまり私たちがいただいたこの救いは、私たちの努力の結果ではなかったのです。神があなたを選んでくださり、神があなたを救ってくださった。すべて神がなしてくださったみわざです。私たちに生まれながらに、この神に背を向けてこの神が忌み嫌うことを愛して行い続けることしかできなかった。そうして神に逆らい続けてきたのです。そんな救いに全く値しない私たちを、祝福をいただくに値しない私たちを神があわれんで、霊的に何にも真理がわからない私たちを罪の深みから救い出してくださいました。

パウロもこの8節で言っています。きょうのテキストの中で私たちが見てきたことは、「あなたがたのうちに良い働きを始められた方」なのです。神があなたがたのうちに良い働きを始めてくださったのです。このみことばを見てお気づきになると思いますが、救いと罪の赦しがゴールであるとすれば、始め

られた良い働きは救いととも終わるのです。でもこの箇所が私たちに教えてくれているのは、救いにあずかった時から働きが始まったということです。私たちがイエス様に似た者に変えていくという聖化の働きです。ですからこのピリピ2：12で「恐れおののいて自分の救いを達成してください。」と記されているのは、罪からの救いではないのは明らかです。信仰者として主に喜ばれる歩みを継続して、ますます主に似た者に変えられていくこと、つまり聖化の歩み、クリスチャンとしての歩みを言っているのです。

#### ・「始められた」

もう一度ピリピ1：6に戻ると、神が「あなたがたのうちに良い働きを始められた」のです。神がイニシアティブをとってあなたの中に働きを始められ、その働きは継続するのです。

#### ・「完成させてくださる」

そして「キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」、その働きは「キリスト・イエスの日」に終わると言うのです。当然これは先の話ですから、この「完成させてくださる」という動詞は未来形が使われています。このことばは、「何かを果たす」とか「仕上げる」、「完了する」、「終了する」という意味です。日本語訳はここで「完成させてくださる」と書いてあります。このことばは「始めた行動を成功した完成へと導いていく」、「何か始めたことを完全な成功へと導いていく」ということです。

### ◎ 救いの永遠堅持

ですから神がご自身の一方的な恵みでもってあなたを救ってください、あなたが主とお会いするその日に確実に、例外なく、キリストに似た者に変えられるのです。あなたは栄光の体をいただくのです。そしてその聖化の過程が完成するのです。ここで私たちはクリスチャン生活のフィナーレを迎えるのです。このピリピ1：6でもパウロは、神があなたを救ってください、守ってください、そしてあなたが栄光の体をいただく時まで、すべて神がこの働きをなしてくださいと教えます。この救いのみわざをあなたがたのうちに始められた方がその働きを完成してください。こうして見た時に、先ほどの1コリントもしく、ピリピ1章を見てもパウロは同じことを言います。神が救ってくださったあなたを神は絶対に手放さない。神はしっかりとあなたを捕らえてくださるのです。ピリピ1：6の最後に「完成させてくださることを私は堅く信じている」とあります。つまりパウロ自身の絶対にこうなるのだという揺るがない確信です。

パウロはこのことばを別のところでも使っています。「私はこう確信しています。」、実はここに今私たちがこのピリピ1：6で見ている「堅く信じ」と同じことばが出てきています。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」、ローマ8：38-39です。パウロの確信に満ちたメッセージです。主の恵みによって救われた私たちは絶対にこの救いを失わない。その確信を持って彼は生きたのです。もちろんいろいろと疑うこともあったでしょう。救われていながらなぜこんな神が憎むことを繰り返し選択するのだろうか。なぜ神が心痛められることをみずから進んで選択してしまうのだろうか、そういう葛藤は我々ひとりひとりも経験しています。なぜ自分はこんなにも罪に対して弱いのだろうか。そういう状態にある人たちの中に、自分の救いを疑う人たちがいるのです。なぜかと言うと、今お話ししたように同じことを繰り返ししている自分、神が喜ばれることをしたいと願っているがそうでないことをしている自分、また神のみことばを聞いても不信仰な自分。頭でわかっているがなかなかそれを心から信じない自分。こういう自分の姿を見た時に、ある人々は「私はもうだめな信仰者です」、「私は本当に神様に喜ばれない信仰者だ」、「ひょっとしたら救われていないのかもしれない」と考えるのです。すべての人ではありませんが、そういう状態になって、もう自分はだめなのだ、自分は神に喜ばれないのだ、自分は神に用いられることなんてないのだ、こうして段々自分や自分の生活、その歩みに対して生じてくる罪悪感を持つことを自分自身でよしとしてしまう人がいるのです。

よくマスコミを通して犯罪を犯した人たちへのこんなコメントを聞きます。「この人は反省していないようです」と。とすると私たちの中ではこういう態度が反省した態度だと、我々もそういう態度がないとだめなのではないかと思ひ始めます。だからある人は私はだめな信仰者です、私はひょっとしたら救われていないかもしれません。注意しなければならないのは、何のためにそんな思いを抱き続けているかです。それがもし神を喜ばせるのならいいのです。でも自分を満足させるだけだったら、全く空しいということです。どちらかと言うと我々はそういう思いを持っているのです。でも我々信仰者はそういうふうには生きないのです。我々信仰者は神によって救われた者たち、神が赦してくださったのです。もちろんそれは罪を軽々に見て私たちは罪を犯しても赦される、そうではないのです。我々は罪から離れようとします。罪を犯した時に私たちはそれと正しく正面から向き合っ、言い訳するのではな

くて、それを神の前に心から悔い改めることです。そうしたらそれで終わるのです。そして私たちはその罪から離れ、神の助けをいただきながら、そして神が喜ばれることを選択していこうとするのです。ある人たちはその罪の謝罪だけで終わってしまっていて、そこにずっととどまり続けている。我々信仰者は、赦された者として生きるのです。神によって赦された者としてこのすばらしい赦しを与えてくれる神がいることを私たちは伝えていくのです。

悲しいことにあなただけではなく、神ご自身もあなたや私がどんなに罪深いかをご存じです。正確に言えば我々よりも正確に神は私たちの罪深さをご存じです。それでいて神は私たちを赦してくださったのです。我々は罪を憎むべきです。罪を憎んで罪から離れるように我々は生きることです。そして罪を犯したら先ほどもお話ししたように、弁解しないで、言い訳しないで、人のせいにならずに、神の前にその罪を心から悔い改めて、そしてその罪から離れ、神の栄光のために生きるのです。あなたはその罪の中にまだとどまっていますか？神様には確かに悔い改めたけれども、でも私のやったことは大きい罪だとか、こんな私をきっと神様は赦してくれないのではないかと。人間的にはその選択は認められるかもしれない。でも信仰的には認められない。主が私たちに教えてくださった救いというのはどんな救いだったか——。神様が私たちを救ってください、そして私たちを守り続けてくれるのです。この救いは失われることはないのです。そのすばらしい祝福をいただいた者として私たちがこの世に語るべきメッセージは、こんな罪人でも主によって赦されたのです、こんな罪人でも赦してくださる主がおられるというメッセージです。

パウロは「罪人のかしら」（1テモテ1：15）だ、「私は、ほんとうにみじめな人間」（ローマ7：24）だと言いました。。なぜかという、ローマ7：15「私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。」、神を喜ばせたいと思っていながら神が憎まれることを私はしている。「私は、ほんとうにみじめな人間」だ。「だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と。私はだめだと、ここでとどまっている人がいるのです。パウロはそのことを知った上で、そこにとどまっていない。私は「主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」（ローマ7：25）と言います。なぜそう言ったかという、神はこんな私を知った上で救ってくださった。その救いは失われることがない、その確信があったからです。自分の救いが本物かどうかを吟味することは大切です。でもあなたがそれを吟味したのなら、そこから動くことです。いつまでも救われているかどうかを心配するとか、そのことを案じるのではないのです。もしあなたが本当に救われているのなら、あなたは生まれ変わっているのです。あなたの心の中には新しい願いがあるのです。神を喜ばせていきたい、みこころに従っていきたい、罪から離れて生きたい、その思いを神様が与えてくださっているのなら、みことばを信じて神は私を新しくしてくださったのだ、その確信に立って主の証人として生きていくことです。

自分の醜さがある程度知っている私たちがすることは、ただこんな私を永遠に救ってくださった神様に感謝します。この救いが永遠のものであることを感謝します。神ご自身が私を守ってくれる。私は彼らに永遠のいのちを与えます。イエス様がそう言ってくださった。「だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」（ヨハネ10：28）、その約束を主ご自身があなたに与えてくださった。ですから、自分の信仰を吟味したあなたは救われたことを喜び、感謝しながら生きることです。神様がなしてくださったその恵みのみわざに感謝を表し続けて生きるのが私たち信仰者の人生です。救われるために一生懸命努力を継続するように生きる、一生懸命頑張ったら救いを得ることができる。それはこれまでの私たちでした。そして神はそんな私たちを救ってくださった。救いは自分の行いではない。神の恵みだということがわかった。では救いにあずかった者たちはどうやって生きたらいいか——。この神の恵みを覚えて神に感謝する生き方、それが我々信仰者としての生き方です。だからあなたの日々はその感謝を表す生き方であるはずで、こんな私を救ってくださったことを感謝しますと。どうやってその感謝を表すことができるかという、みことばに従うことです。我々はみことばからみこころを知り、みこころに従っていくのです。それが神が私たちに求めておられることであり、神がそれを喜ばれるのです。そうして私たちの感謝を表すのです。1コリント1：8「主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで堅く保って」くださると。与えられた救いを私たちは絶対に失わないと。

### 3. 「責められるところのない者として」

三つ目を見てみましょう。何を堅く保ってくれるのか——。

#### 1) 完全な救い：「責められるところのない者」

「責められるところのない者として」とあります。これはこの救いが完全であるということです。完全な救いの話です。「責められるところのない」という形容詞は新約聖書に5回出てくるのですが、この箇所以外の4カ所はすべて「非難されるところがなく」と訳しています。1テモテ3：10もテトス1：

6、7も。そしてもう一つはコロサイ 1 : 22 ですが、そこを見ると「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。」とあります。これは救いのことです。しかも「今は」と言っているのは、今もこの救いにあずかっている人たち、それを明らかにするために「今」ということばをあえて強調して使っています。救いにあずかっている「今」、この救いにあずかった「今」と。

### ◎救いによって主からいただいた恵み、祝福！

その後でパウロはあなたが救われた者としてどんな祝福を神様からいただいたのかを記します。

#### (1) 神ご自身との和解 ローマ 5 : 10

22節には神ご自身との和解という祝福をあなたがいただいたことが書いてあります。「あなたがたをご自分と和解させてくださいました」と。神様と和解させていただいたから、神から非難されないのです。神から非難されるのは神に逆らっているからです。でもその罪を赦していただいて、そして神と和解したならば、神が私たちを非難されることはないのです。ですから救いによって私たちはこの神との和解というすばらしい祝福をもらっているのです。

#### (2) 神の御前に立つ特権：

二つ目にこの救いによっていただいた祝福というのは、神の御前に立つ特権です。救われたことによって私たちは神の前に立つことができるようになったのです。コロサイ 1 : 22の最後に「御前に立たせてくださるためでした。」と書いてあります。「立たせ」というのは神の前に、神の御前に立つ条件の話です。どんな条件があるかを三つの形容詞が私たちに教えます。「聖く」、「傷なく」、「非難されるところのない」と。だから神の前に立つことができるのだと言うのです。救われたあなたは「聖く、傷なく、非難されるところのない者」になったから神の前に立てるのです。神と和解したから非難されない、神との和解だけではなく、私たちはこの神の御前に立つことができる、それが赦された存在だと言うのです。

①「聖く」——全くその罪を赦していただいた。

②「傷なく」——思い出してください。いけにえを捧げる時に傷あるものを神の前に持ってきてはならなかった。神は救ってくださいました。そしてあなたを傷のない者としてくださり、神の前に立つことができるようになったのです。我々は罪に染まっていて全く神の前に立つにふさわしくなかった。でも神は救いによって、このような存在に私たちをしてくださったのです。

③「非難されるところのない」——先ほども見てきたように、「とがむべきところもない」、「責められるところがない」。

でも我々が自分を見た時に私は聖くないし、傷だらけだし、非難されるところばかりだと。なぜなら実生活を見た時に、完全な生活を送っている人なんかいます？完全な生活を送りたいと願っていても送っていないのが我々ではないですか。ではこのみことばは私が天に行ってから話なのかというと、いえ、今のあなたなのです。確かに我々、実生活においてはこれとは全く違う生き方をしているのです。しかし、神の目にはあなたは「聖く、傷なく、非難されるところのない者」として映っているのです。なぜかというと、あなたの上には「聖く、傷なく、非難されるところのない」主イエス・キリストの血潮が塗られているからです。神はイエス・キリストを通してあなたをごらんになっておられるのです。だから私たちをこんなふうに見てください、そして見るだけではない、私たちを神の御前に歓迎してくださっているのです。あなたも私もこの神の前に立つことが赦されているのです。

あなたがお祈りする時、だれに祈っていますか？この全知全能の神でしょうか？我々の救い主でしょうか？もし神があなたを門前払いされてここに来ることができなければ、どうやって祈ります？神があなたを歓迎してくださっているから、我々はこうして神の前に祈ることが赦されているのです。あなたがこうして神に祈ることができるということがあなたは神の御前に立つことができているのです。なぜなら神はこうして救いにあずかったあなたのことを「聖く、傷なく、非難されるところのない者」として見てください。もちろん私たちが栄光のからだをいただいた時に、まさに「聖く、傷なく、非難されるところのない者」になります。でも今このような状態でも、神はあなたや私をこのように見てください。それが神が下さった救いなのです。だから私たちはいつでもこの神の前に出て行くことができます。

**結論：主なる神が与えてくださった救いは完全！**

#### (1) 完全に救うこと

ヘブル 7 : 25 を見てください。「したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。」とあります。「ご自分によって神に近づく人々」、すなわちイエスを信じる人々のことです。「完全に救うことができになります」、あえて「完全」ということばを使っているのは、神がなさ

れる救いは「完全」だからです。神がなしてくださった赦しのみわざは「完全」なのです。これだけは赦すけれども、この罪は赦さないというのはないのです。すべての罪は「完全」に赦されたのです。

## (2) おできになります

しかもあえてその後に「おできになります」と言ったのは、神にはその力があるということです。私たちの赦しは不完全です。でも神の赦しは「完全」なのです。神は我々罪人を完全に100%聖い者にする力を持っている。すごい約束です。これが神ご自身が約束してくださったことです。

しかも同じヘブル10:14に「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。」とあります。「一つのささげ物」と。人々はいけにえを継続して捧げなければいけなかった。しかし、イエス・キリストが来てくださり、あの神の子羊であるイエス様のいのちが捧げられることによって、ただ一度だけそのみわざがなされることによって「全うされた」と。このことばは「完成する」とか「完全に達成する」、「目標に到達する」という意味です。イエス・キリストの犠牲によって救いは完全に達成された。だからイエス様を信じる人たちはこの救いにあずかるのです。主が与えてくださる救いというのは完全であり、しかもそれを絶対に失うことはないのだと。

私たちはみことばから主が与えてくださったすばらしい救いについて見てきました。きょうも我々が見てきたように、この救いは決して失われるものではない。だからあなたも私も自分が救われているかどうかということでも思い悩むことをやめなければいけません。先ほども見てきたように、救いにあずかった者として感謝を持ってこのすばらしい主を宣べ伝え続けていくことです。私たちがイエス様にお会いする時、神は私たちを「責められるところのない者として」、非難される、訴えられるところのない者として私たちを立たせてくださると。こんな祝福を神様は私たちに下さったのです。このみことばの約束は皆さんの心を鼓舞しませんか？皆さんの心を励ましてくれませんか？この約束はあなたに与えられた約束です。みことばに立って生きていくというのはそういうことです。我々がどう思うかではない。神がどう言われているかです。その約束に立つのです。主イエス・キリストの救いをいただいたならば、その救いは永遠のものです。私たちはそのすばらしい祝福をいただいた者として感謝の生活を送るのです。そのような生活をこの一週間も神の助けをいただきながら送っていきましょう。すばらしい祝福が主を信じる者たちに与えられると。このメッセージこそこの世の中の人々が聞かなければいけないメッセージだと思いませんか？私たちが伝えるのです、ことばをもって。私たちの生き方をもって……。